

ら、これによりてもとの形を考へれば、*Khälien* とか *Khliien* とか、もしくは *Khlien* を寫したものと思はれる、従つて之を祁連の寫した所と同一と考へて然るべきであらう。

さて自分がかゝる解釋を敢て試み、此等の語を漢語の少しく轉訛したものに過ぎないと見るについては、別に一個の理由がある、自分は匈奴に限らず、北方諸民族の言語に於て、或る種のもものは漢語其の他の外國語より導き入れたものが、從來知られて居る以上に多く存すると考へるもので、例を僅少の匈奴語中に求めても、居次は漢語公主の轉訛と認められ、近く白鳥博士は有名なる單于といふ語も、漢語に外ならぬと解せられた。¹⁷⁾ 今自分が匈奴の遺語中に明白に純粹の匈奴語と考へらるゝ天の義なる撐犁の外に、別にまた同じ天の義といふ祁連なる語を解して、漢語天の轉訛に外ならぬと解するのは、かゝる方針の下に考へ得た結果に外ならぬ。

しかしながら祁連、赫連等の語を、漢語天の轉訛と解釋するには、また更に別の説明を與へ得るかと思ふ。それは此等の二字で示した切音を考へると、それが即ち *Kien*, *Khien* に外ならぬから此等の二字はやがて *Khien* といふ語を寫さうとしたものであると見ることである。一體古くは同音の字を用ゐて、所謂假借によりて或る文字の音を示してゐたのを、新に切音を用ゐて示すことになつたのは、後漢末から魏の時代にかけて起つたことで、孫叔然の爾雅の音義に窺るといふのが、顔氏家訓音辭篇をはじめ、古くからの説明である、而して此の法の根原を字母の排列等と共に、西域の聲音學に歸する説も、能く知らるゝ通りであるが、別に錢大昕などの唱へた如く、¹⁸⁾ 所謂双聲疊韻によりて生じたものであるといふ考もある。今此等の説の是非につきて云爲すべきではないが、しかし元來一字